―サッカー部―――

□体育会名：関西学院大学体育会サッカー部
□創部年：1918年（大正7年）
□2025年度会員数：135人（4年45人、3年29人、2年29人、1年32人）

□同窓倶楽部名：関西学院大学体育会部サッカー部同窓倶楽部
＊関西学院同窓会　公認団体
□同窓倶楽部通称：―
□設立年：―
□会員数：―

関学サッカー部は1918（大正7）年に創部され、2018年4月に創部100周年を迎えた。

1929年4月、原田の森から上ヶ原への移転に伴い、サッカー部はポプラ並木に囲まれた専用グラウンドを持つようになり、練習環境が大きく改善した。その結果この年、現役・OB混成チームの「関学クラブ」が明治神宮外苑競技場（現在の国立競技場。43年10月21日に雨の中で学徒出陣壮行会が行われた場所）での第9回全日本選手権（後の天皇杯全日本選手権）決勝で、法大を3―0で破り初優勝を果たした。

その後、第10回、30回、33回、35回、38回、39回と7度の天皇杯優勝を重ねている。なお、天皇杯は第31回から授与されるようになった。これまで県代表あるいは地域代表として47度（大学として33度、関学クラブとして10度、全関学として4度）の出場を果たしている。

また同じ1929年から、関東大学リーグと関西学生リーグの優勝校が対戦する東西学生蹴球対抗王座決定戦が始まった。この年関学は東大に2－3で競り負け初代王座を逃したが、65年まで行われたこの大会で通算8度の優勝を果たしている。原田の森から上ヶ原への移転が、関学サッカー部黄金時代の原点であった。

2015年には関西学生選手権・総理大臣杯・関西学生リーグ・全日本大学サッカー選手権すべてに優勝し、大学サッカー界史上初となる単独での四冠達成という快挙を成し遂げた。

関西学生リーグでは23年の第1回から参加し、最多31度の優勝回数を誇る。その他、関西学生サッカー選手権（トーナメント）6度（準優勝6度）、関東・関西の大学サッカーチャンピオンカップで2度、全日本大学サッカー選手権で1度の優勝を飾っている。

ワールドカップ（W　杯）・オリンピック（五輪）・海外遠征等に日本代表選手として過去40人が関学から選抜。日本サッカー協会の要職（日本サッカー協会会長、副会長、常務理事、理事、技術委員長等）、日本代表監督・コーチ・主将、Jリーグ監督・コーチ、Jリーグ役員も多数輩出している。また2025年現在、23人がJリーグ現役プレーヤーとして活躍しており、引退したJリーグＯＢも多数各方面で活躍している。

1964年東京五輪及び68年メキシコ五輪の日本代表監督を務め、メキシコで銅メダルを獲得した日本代表監督の長沼健さんはその後、日本サッカー協会会長に就任。初の日韓共催2002年 W 杯招致で大活躍した。幾多の功績を認められ、1990年に藍綬褒章を、2004年には旭日中綬章を授与されている。

日本サッカー界の発展に顕著な貢献をした方の中からサッカー殿堂入りした関学サッカー部OBは鴇田正憲さん、長沼健さん、平木隆三さん、加茂周さんの4人。日本サッカー発展の歴史の中で、大きなターニングポイントとされるのが、1956年メルボルン五輪予選の韓国戦だ。韓国と東京・後楽園競技場で2試合が行われ、1勝1敗ののち抽選で、日本が五輪出場権を得た。その時の主力メンバーが、鴇田さん、長沼さん、佐藤弘明さん、北口晃さん、そして平木さんという関学からの5人だった。

公式戦だけではなく、学校間の交流を目的とした定期戦を早大とは1924年から継続し、幾多の日本代表選手・名選手同士の対戦で多くの両校ファンの声援を受けている。関大とも1953年から対戦を続け、早関定期戦と同様、当時では珍しかった西宮球場でのナイター試合が多くの観客を楽しませた。

上ヶ原移転後、長らく使用していたグラウンドが中・高等部新校舎建設のため閉鎖されたのが、1988年3月末のこと。伝統あるグラウンドでの「蹴り納め会」が同年3月20日に開催され、数十人のＯＢが集結。OB同士の親善試合、OB対現役、超OB対神戸FCレディース、現役の関学対関大のゲームで盛り上がり、多数の日本代表選手・名選手が練習に励んだ思い出のグランドでの蹴り納めを行った。

その後、新グラウンド（元高等部校舎跡地、現中等部グラウンド）整備のため専用グラウンドが無くなり、宝塚市小林の大同酸素（現エア・ウォーター）株式会社のグラウンドを借用して練習。2年後に現中学部グラウンドがサッカー専用グラウンドとして完成し、学校内へ戻る事ができた。

1993年のJリーグ発足によってサッカー人気が高まり、各学校が専用の人工芝グランドを持ち始め、関学も人工芝グラウンドの建設計画に着手、幾多の困難を乗り越えて2009年、待望久しい人工芝グラウンド（第4フィールド）が完成した。この年の8月8日、第86回早関定期戦を新グラウンド完成記念試合と銘打って開催、両校OBも多数集い、新グラウンド完成を祝うとともに、両校の親睦を深めた。

近年の日本サッカーレベルの向上は目覚しく、ヨーロッパやアジア等海外で活躍する選手は増加の一方、幼稚園、小学生時代からの徹底した組織的・科学的な指導により、プレーの技

術は世界で通用するレベルに達して、世界中から注目される時代になった。その結果、大学サッカーの技術、体力も格段に向上している。指導者も充実し、全国が同レベルに均一化し、大学のリーグ戦や関西・全国のトーナメント戦で勝ち続ける事は非常に困難になって、先輩達の期待に簡単に応えられなくなってきている。特に近年、夏と冬の全国大会ではベスト4の壁が破れず大変悔しい思いを続けているが、日本の大学サッカーは最強の純アマチュア集団であり、常にその頂点を目指して日々の練習に取り組んでいる。

ただ、男女部員約150人と高等部が等しく練習するためには、1面しかないグラウンドでは不足で、監督・コーチは練習時間の割り振りに大変な苦労を強いられている。

女子サッカーは2011年女子W杯優勝をはじめとするなでしこジャパンの活躍に刺激され、大学女子チームが各校で創部されてきた。関学では09年に発足、その年の秋季リーグ戦から公式戦に参加し13年の春リーグ2部で優勝、秋リーグから1部リーグに昇格した。しかし1部リーグのレベルは高く、近年は1部降格と昇格を繰り替えしている。

関学サッカー部の黄金時代は長く続いたが、学園紛争の時代以降、他大学のような推薦入学ができなくなり、指導者が毎日練習を見る事もできず、長い低迷期も経験した。その間の1974年から2003年まで、副部長（1974～75年）、部長（1976年～2003年）として29年間にわたり学生を指導して下さったのが今田寛先生だった。3度の2部落ちを経験した時代の学生たちに、常に激励や温かい言葉を掛け、彼等にとって大変大きな励ましとなった。今田先生が2011年春の叙勲で瑞宝重光章を授与された事は、関学サッカー部にとって大きな誇りとなった。

関学サッカー部はサッカーに本気で取り組み、自分達の限界に挑戦する事によって、達成感を持って、人間として成長し、実社会へ出る事を第一の目的として部活動を行っている。トップチームであるＡチームの公式戦・定期戦のほか、Ｂ・Ｃチームが「Independence　League」という組織を全国の大学チームで作り、学生の自主運営によって各地域リーグ及び全国大会を開催、関学は2011年度に初めて全国優勝を果たし、その後も優勝を重ね通算5度の優勝を飾っている。

また、関学生として、又社会人として成長するためにOB等を招いてのセミナーを開いて部員の教育を行っている。大学の理解の下、推薦入学が各学部で認められるようになって選手の質も上がり、「強化クラブ支援金制度」によって優秀な指導者を確保でき、関西制覇、全国制覇を常に狙えるチームになっている。歴史と伝統を誇る関学サッカー部が未来永劫発展し、グローバル化した世界で活躍できる有能なサッカー部出身者が数多く育成される事を期待している。

□サッカー部　部史　編集担当者

戸川　忠雄（昭和39年　法学部）